

チェーザレ・パヴェーゼ全集7

丘の上の悪魔

河島英昭訳



訳者について

河島英昭（かわしま・ひであき）

一九三三年東京に生まれる。東京外国語大学
イタリヤ語科卒業。現在——同大学講師。

訳書——モラヴィア『無関心な人びと』『関
心（テンツイオーネ）』ほか。

丘の上の悪魔——パヴェーゼ全集 7

一九七〇年七月三十一日初版

一九七四年七月一〇日六刷

著者チエーザレ・パヴェーゼ

訳者河島英昭

発行者中村勝哉

発行所株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一—二

電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六二七九九

堀内印刷・美行製本

ブックデザイン平野甲賀

©一九七〇年（検印廃止）落丁・乱丁本はお取替えいたします。

チエーザレ・パヴェーゼ全集 7

丘の上の悪魔



晶文社

Cesare Pavese †

IL DIAVOLO SULLE COLLINE

(Tutte le opere, volume 7)

Original Copyright

by Giulio Einaudi editore S. p. A., Torino

Japanese Copyright © 1970

by Shobun-sha Publisher, Tokyo

丘の上の悪魔

河島英昭訳

5

解説

233

丘の上の悪魔

ぼくらはとても若かった。あの年ぼくは一睡もしなかったのではないか。しかしぼくよりもっと眠らない友だちがいて、朝の一番列車が発着する時分には、もう駅前を歩いている彼の姿を見かけることがあった。ぼくらは彼の家の戸口で夜遅くに別れた。ピエレットはまたひとまわりして、夜明けを見届けてから、コーヒーを飲んだ。いまは眠そうな掃除人夫や自転車で行く人びとの顔を観察していた。その彼でさえ夜の会話を思い出せないことがあった。ぼくたちを監視しているうちに、話を鵜呑みにして、落着いた声で言ったりした。「もう遅い、寝よう」

誰かよその人間が、ぼくらのあとについてきても、映画がはね、クラブもバーも店をしめ、話の種もつきたそんな時刻に、ぼくらが何をしようとしているのが、わかるはずはなかった。ぼくら三人と並んで、ベンチに腰をかけても、不平や嘲笑を聞かされるだけだし、女の子を起こしに行こうとか、丘の上で夜が白むのを待とうといった思いにつきに、心を掻きたてられても、やがて

ぼくらの気分が変ると、ためらいはじめ、思い切って家へ帰っていった。そして翌日ぼくらにたずねた。「あれからどうした？」それに答えるのは容易でなかった。ぼくらは酔っぱらいの愚痴を聞き、ポスター貼りのようすを眺め、市場をいくつかまわって、大通りを行く羊の群れを見た。そういうときにはピエレットが言った。「ある女と知りあったんだ」

相手は半信半疑だった。

「忍耐がいるぜ」ピエレットが言った。「出窓の下を何度も何度も往き来するんだ。ひと晩じゆう。女はわかつている、気づいているんだ。頭で知ろうとしても駄目だよ、女は血のなかで感じているのだから。そのうちに耐えきれなくなつて、ベッドから跳び出してくる、きみのために鎧戸を押し開く。きみは梯子をたてかけ……」

しかしぼくら三人のあいだでは女の話をするとは滅多になかった。少なくとも、まじめに話をしたことは、なかった。ピエレットもオレステも自分のすべてをぼくに語ったわけではない。だからこそぼくは彼らが好きだった。ぼくらの仲を裂く女は、もっとあとから来るだろう。さしあたって、いまはこの世界のことだけを、雨を、太陽を、語りあう。それはあまりに楽しく、眠りに帰ることは時間の浪費いがいの何ものにも思えなかった。

あの年の、ある晩、ポー河畔の並木のベンチに、ぼくらは腰かけていた。オレステが何度か小声で言った。「もう寝よう」

「そこでまるくなれよ」とぼくたちは言い返した、「きみは夏を無駄にしたいのか？ 片目で

眠れないのかよ？」

オレステはベンチの背に頬をもたせかけながら、ぼくたちを盗み見た。

都会では誰も眠らないんだ、とぼくは話を続けた。「いつも明りがついて、いつも昼間だ。毎晩、することがあるんだろう」

「だからきみたちは子供だ」とピエレットが言った、「子供だ、おまけに欲張りだ」

「じゃ、きみは何だ？」ぼくは言った、「年寄りか？」

オレステがとつぜん跳び上った。「年寄りは眠らないというぜ。ぼくらは毎晩歩きつくめだ。

いったい誰が眠っているんだ」

ピエレットがにやりとした。

「何だ？」ぼくは用心ぶかく言った。

「眠るためにはまず女がいる」ピエレットは続けた。「だから、きみたちも老人も眠らないんだ」

「そうかも知れない」オレステがつぶやいた、「だけどやっぱり眠いや」

「きみは都会の人間じゃないからさ」と、ピエレットが言った。「きみのような人間には夜がまだ意味をもっている、古い感覚だよ。まあ、犬か鶏なみだ」

二時を過ぎていた。ポー河の対岸には、丘が白じらと輝いていた。冷ややかな夜気は、寒いほどだった。

ぼくらは立ち上って、市の中央に引き返した。いつでも自分を優利な立ち場に置いて、ぼくたちを無知蒙昧の徒よばわりするピエレットの特異な才能を、ぼくはつくづくと思い返していた。オレステもぼくも、たとえば女のことを考えて眠れない、というほどのことはなかった。トリートノに来るまえ、ピエレットはどんな生活を送っていたのだろう、ぼくは何百回も胸のうちに問い返してみた。

駅前の花壇のベンチでは、あのまばらな木陰に、ふたりの乞食が口を開けて眠っていた。上着はなく、髪もひげも縮れ、ジプシーみたいだった。数歩離れたところに公衆便所があった。涼しい夏の夜ではあったが、あたりに悪臭がたちこめ、そのうえ長い日中の陽射しと喧噪と、溶けたアスファルトと汗と、群衆の不安とが、名残りをとどめていた。日暮れどきには、それらのベンチ——トリートノの都心の憐れなオアシス——に、みすぼらしい女がすわり、落ちぶれ果てた行商人がすわって、いつも手持ちぶさたに、何かを待ちあぐんでは、年老いてゆく。何を待つのか？ ピエレットは言った、彼らは何か大きなことを待っているのだ、町の崩壊とか、天の啓示とかを。ときおり夏の嵐が襲って彼らを追い払い、何もかも洗い流していった。

その晩のふたりは喉を掻き切られたように眠っていた。人気がない広場の上でネオンサインが虚ろな言葉を空に語りかけながら、ふたつの死体を照らしていた。「みんな部署についている」とオレステが言った。「ぼくらもああいうふうにするんだ」

彼は家に帰ろうとした。

「いっしょに来いよ」ピエレットが言った、「家に帰ったって誰も待っていないくせに」
「きみたちの行くところだって同じじゃないか」とオレステは言い返したが、そのままついできた。

ぼくらは新しいアーケードの道を歩いた。「あのふたりが」ぼくは静かに言った、「最初の陽射しに広場で目を覚ますときは素晴らしいだろうなあ」

ピエレットは何も言わなかった。

「どこへ行くんだい？」立ち止まって、ぼくは言った。

数歩まえを歩いていたピエレットも、立ち止まった。

「どこかに行きたくても」とぼくは言った、「どこもかしこも閉まっている。ひとつ子ひとりいない。この大袈裟な電気の飾りは、何に役立っているのかなあ」

ピエレットはいつもの言い方をしなかった《そういうきみは、何に役立っているんだい？》と。そして低い声で言った、「丘の上に行こうか？」

「遠いよ」

「遠いけれど、もう匂いはしている」と彼が言った。

また大通りを下った。橋を渡るとき、ぼくは寒けを感じた。ぼくらは勝手知ったこの区域を抜け出ようと、急ぎ足で坂道にとりついた。あたりは、湿って、暗く、月もなかった。螢が点滅しながら行手をよぎった。ややあってから、ぼくらは歩速をゆるめた。汗をびっしょりかいていた。

歩きながら、自分たちのことを話した。自分たちのことを激しく語りあったので、オレステも話に巻き込まれてしまった。酒や仲間に浮かれて、そのあたりの道は何度か通った覚えがある。しかしそれはどうでも良かった。いずれにせよ、そこへ出掛けて、登って、丘の大きな塊りを両足で踏まえるための、口実にすぎなかった。ぼくらは畑のあいだを抜け、塀にそって別荘の鉄格子の門の脇を通り、アスファルトと森の匂いをかいだ。

「ぼくには花瓶にさした花の匂いと同じだ」とピエレットが言った。

奇妙なことに、ぼくらはまだ頂上まで登ったことがなかった、少なくともその道を通っては。道のどこかに、もちろん、平らになる個所が、登りつめた果ての断崖が、ひとつの隘路が、あるにちがいがなかった。ぼくは勝手に想像していた。そこには最後の垣根があるだろう、あるいは平野に向ってひらかれたひとつのバルコニーがあるだろう。近くのほかの丘からは、たとえばスベールガやピーノ（いずれもトリノ市の東にある丘の、標高六六九と四九五メートル）からは、以前に昼間、向う側の景色を見たことがあった。波打つ丘の彼方に、漠とした森の影を指さして、オレステは彼の故郷だと言った。

「もう、ほんとうに遅いよ」オレステが言った。「このあたりにはナイトクラブがたくさんあったのだけだなあ」

「時間によつては閉まることもあるんだぜ」ピエレットが言った。「しかし、なかでは酒盛りが続いているんだ」

「丘に来るだけのことはあるよ、夏には」とぼくが言った、「門や錠戸を閉めて楽しむにして

も」

「庭ぐらいあるだろう」オレステが言った、「草原でも良い。公園でだって、眠れるんだ」

「そのうちに公園がなくなるときもくる」ぼくは言った、「森やぶどう畑になってしまふんだ」オレステが何かつぶやいた。ぼくはピエレットに言った。「きみは田舎を知らないんだ。きみはひと晩じゅう歩きまわっているけれど、田舎は知らないんだ」

ピエレットは答えなかった。ときどき、どこからか犬が吠えた。

「休もう」と、曲り角で、オレステが言った。

ピエレットは彼の思いの淵から浮かび上ってきた。「何しろ」と彼は早口に言った、「野兎も水蛇も地下にもぐって、人の足音を恐れているんだ。ガソリンの臭いがあたりを支配している。

きみたちの氣にいるような田舎がまだどこに残っていると言うのか？」

彼はぼくに突っかかってきた。「誰かが森のなかで喉笛を掻き切られていたら」彼はいつもの断固とした口調で宣告を下した、「きみは信じるつもりかい？それが伝説の事件であるとか、死者のまわりではこおろぎが黙っているとか、血の海が唾いじょうのものを湛えているとか？」

オレステはぼくたちを待ちながら、不快そうに、唾を吐いた。そして言った。「氣をつけろよ、車が下りてくるから」

ゆっくりと、音もなく、うすいグリーンの大きなオープンカーが姿を現わした。そしてふわりと、生き物のように、止まった。車体の半ばはまだ木立ちの闇に沈んでいた。ぼくらは怪しみな

からそれを見つめた。「ライトが消えている」オレステが言った。

若い男女が乗っているのだろう、とぼくは思った。ぼくは遠く離れたかった。こんな狭い道で、誰ともあいたくなかった。なぜ、トリーノの夜景に目を見張るだけで、満足しないのだろう？

なぜ、ぼくらの田舎のなかに、ぼくらをそっとしておいてくれないのだろう？ オレステがうつ向き加減にぼくたちをうながした。

車体とすれちがったとき、ささやき声が、衣ずれの音が聞こえるのではないか。いや、笑い声が聞こえるだろう、とぼくは決めてかかっていた。しかし、実際には、ハンドルを握った男の姿が垣間見えただけだった。若い男がひとり、のけぞって、天を仰いでいた。

「死んでいるのか」とピエレットが言った。

オレステは早くも暗がりを出ていた。こおろぎの声の降りしきるなかを、ぼくらは進んだ。木立ちの陰の、その数歩のうちに、ぼくはあまりにも多くのことを思った。ぼくは振り向こうとしなかった。ピエレットはぼくの脇で黙り続けていた。緊張は耐えがなくなった。ぼくは立ち止まった。

「ありえない」ぼくは言った。「あの男は眠ってなんかいない」

「何を恐がっているんだ？」ピエレットが言った。

「きみは見たのか？」

「眠っていたぞ」

あんなふうに通い、眠る者はいない、とぼくは言った。ピエレットの怒鳴り声がぼくの耳のなかにまだひびいていた。「誰が車で通ろうと勝手じゃないか」ぼくらは振り返って、木立ちの下の黒々とした曲り角を見つめた。ひとりでに燃えるタバコの火のように、明滅しながら、螢が道を横切った。

「静かに、また走り出すかも知れない」

ピエレットが言った。ああいう車を持てるぐらいなら、何でもできるさ。星空を見ることができて、できるだろう。ぼくは耳をそばだてた。「見られたかも知れないぞ、ぼくらは」

「呼んでみよう」と言って、オレステが叫び声をあげた。野獣のようなその声は、夜の帷を引き裂き、殷々とこだまして、天と地を満たした。牡牛に似たその吼え声は、しかしながら、すぐに酔っぱらいの笑い声になって、終ってしまった。ぼくが蹴上げた足を、横つとびにオレステが逃げたからだ。ぼくらは耳をすませた。犬がけたたましく吠えたて、こおろぎの鳴き声がおびえてやんだ。何も聞こえない。オレステが口を開け、またあの叫び声をあげようとした。すると、ピエレットが言った、「よいい」

こんどは三人いっしょに吼えた。ぼくらの声は、長々と尾を引き、こだまとなって、寄せては返した。それが、闇夜を照らす燈台の光のように、尾根を越え、小径をすべり、黒々とした闇を駆け抜け、草の根を分けて、獣の穴ふかく押し入り、すべてをゆるがすかと思うと、ぼくは身の毛がよだった。

あの犬がまた吠え狂った。ぼくらは耳をそばだて、曲り角を見つめた。《驚いて死んだかな》とぼくが言いかけると、車のドアをしめる鈍い音が聞こえた。オレステがぼくの耳にささやいた。「すぐにパトカーが来るぞ」あの木立ちを見つめながらぼくらは待った。しかしいつまでたっても、何ごとも起こらなかった。もう、犬も静かになった。星空の下で一面にこおろぎが鳴いていた。ひとときわ濃いあの闇を、ぼくらは見つめた。

「行ってみよう」ぼくが言った、「三人もいるんだから」